



## 大学院設置基準でのFD「義務」

—大学院設置基準一部改正—

平成十八年三月三十一日付 け文部科学省令第十一号  
(教育内容等の改善のための組織的な研修等)  
第十四条の三 大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。  
(施行期日)  
第一条 この省令は、平成十九年四月一日 から施行する。

3

## 大学教育改革の現状(1)

- すでに啓蒙段階を超えつつある
  - 学生による授業評価は、全体で691大学(約97%)、国立では87大学(約100%)で実施
  - 授業評価の結果を改革に反映させる「組織的取り組みが行われている」のは、国立51大学(約59%)、公立23大学(30%)、私立211大学(約39%)

(文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」平成18年6月)

4

## 大学教育改革の現状(2)

- 経営重点大学／教育重点大学／研究重点大学への分化
- 経営的合理性、教育的合理性、研究的合理性、組織的合理性などの適切な配分
- それぞれの大学での最適解
- ローカリズムの尊重

5

## 教育改革の現状とセンターの立場

各大学の教育現場は、経営的合理性、教育的合理性、研究的合理性、組織的合理性などを適切に配分して、それぞれの場で最適解を求めている。

- 1) それぞれのローカリズムを尊重する
- 2) 啓蒙ではなく共同の連携へ
- 3) 内容抜きの教授法で話し合うことの限界  
(研修の自己組織化の援助)

6

## ヒアリングから見る京大FDの特異性

- FDの実質的全学展開(抵抗感の消失)
- 学部を主体とする教育体制
- 研究体制維持のための教育という問題意識(研究中心大学の典型例)
- 「自由の学風」理念の機能見直し
  - 学生の変化、社会的要請の変化(工学部、医学部など)
  - 個人的組織的営為への介入(公開授業、学生の授業評価など)の承認?

7

## 全学教育シンポジウム

- 10年以上続けられている一泊二日の合宿研修で、教職員が平均250名が参加
- 本年度は、9月14日から15日、ウェスティンホテル淡路で「責任ある教育体制とは何かー京都大学における教育の将来像を問う」を主題にして、教員196名、職員49名が参加
- 当初の啓蒙段階を終え、ここ3年ほどは、具体的な課題に向けて学内コンセンサスを調達することがめざされてきている

8

## 大学院生のための教育実践講座

- 今年度までに2回実施
  - 京都大学の社会的責任への応答
  - 就職対策 — 総長名の修了証の授与
  - 短期間の集中 — 短いセッションの切れ目ない連続ボディワーク
  - 参加者には好評だが、参加者少数
    - 宣伝のあり方の検討要
  - 組織的・体系的な研修システムの構築の必要性
    - TA研修などとの連動

9

## センターの関与する学内FD

- 公開授業・検討会、授業参観プロジェクト
- 全学教育シンポジウム、教育改善連続シンポジウム、(公開研究会、大学教育研究フォーラム)
- 平成16年度採択 特色GP  
「相互研修型FDの組織化による教育改善」
- 遠隔FDの試み

10

### 公開授業・検討会

## 公開実験授業「ライフサイクルと教育」

- (平成9年度から実施)
- 第1に、授業者と受講生との相互形成をめざす「授業実践」
  - 第2に、生態学的・現象学的研究や機器・調査票などによる実証的研究のための「実験授業」
  - 第3に、授業観察と授業検討会を通して授業者と観察者とが相互に研修する(FD)「公開授業」

11

### 公開授業・検討会

## 公開授業の諸特性

- (1) 体験の具体性・全体性
- (2) 相互肯定・相互受容のために
- (3) 相互研修の共同体へ
- (4) 反省・学生評価・授業公開
- (5) 多様な実行形態
- (6) 他の諸事業との相互補完へ

12

### 公開授業・検討会

## (1) 体験の具体性・全体性

- 大半の大学教員は「教えられたように教えて」きた
- 自己反省の体験は限定され貧しい
- 授業参観の体験は具体的・全体的である
- 言語化できない部分で得られる成果が大きい

13

(2) 相互肯定・相互受容のために

- 授業公開は、お互いが学び合うために行われる
- 互いの非難や批判、自己弁明のためになされるのではない
- 基本的には互いの営為の受容と肯定のためになされる

(3) 相互研修の共同体へ

- 公開授業は教室の壁を崩す
- 孤立した反省から反省の共同体へ

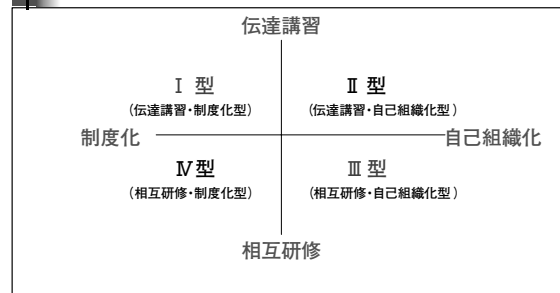
FDの実現  
＝教育する教授団の生成

〈取組の背景と目的〉

啓蒙型FDから相互研修型FDへ

- 今日の高等教育では、一方的伝達による〈啓蒙型FD〉(第Ⅰ期)ではなく、当事者たちが自分たちのローカルな現場性に根ざして自分たちで組織する〈相互研修型FD〉(第Ⅱ期)が求められている。
- 本プロジェクトは、この相互研修型FDの具体的で実践的なモデルを提供する。

(参考) 啓蒙型FDと相互研修型FD



(参考) FD組織化Ⅰ型とⅢ型の比較

	Ⅰ型 (伝達講習・制度化型)	Ⅲ型 (相互研修・自己組織化型)
参加動機	他動的	自発的
達成効果	啓蒙(浅く・一過的)	自己開発(深く・持続的)
組織化方式 マニュアル化 プログラム化	全体への呼びかけ容易 可能で容易 均質で構成可能	組織化の偏り 不可能か困難 予見も構成も困難
操作と効率	操作可能で効率的	操作困難で非効率
他類型へ	Ⅲ型への移行も可能	Ⅰ型の指導者研修も可能

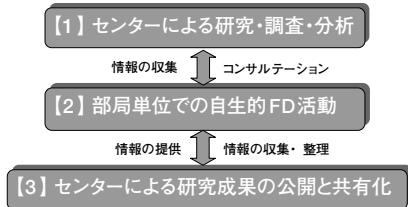
〈京大の現状〉

「自由の学風」のもとでの  
相互研修型FDの組織化

- 全学共通科目の人文系、実験系、外国語系で、さらには工、薬、医、経済などの学部で、自生的な相互研修型FD活動が実施されてきている。
- この自生的FD活動をサポートするシステムが、センターの活動などを通じて、作られてきた。
- 大学全体からのこのサポートシステム組織化への支援は、センターの設置・拡大改組、総長特別経費の継続的交付など、恒常的・組織的である。

特色GP

【概念図1】相互研修型FD支援システム



特色GP

〈新しい取組〉

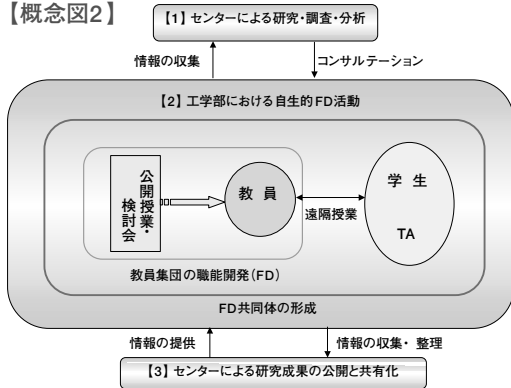
工学部との協働によるFD支援システムの成熟化

- 工学部の「授業評価の実施によるカリキュラム改善」(創成科目によらない創成型教育の有効性の検証など)、「公開授業による相互研修」、「遠隔授業」などを支援する。
- ここから得られた知見を、「大学授業ネットワーク」、「モノグラフ」、「公開研究会」などによって共有可能なものにする。
- こうして、「FD支援システム」をさらに成熟させる。

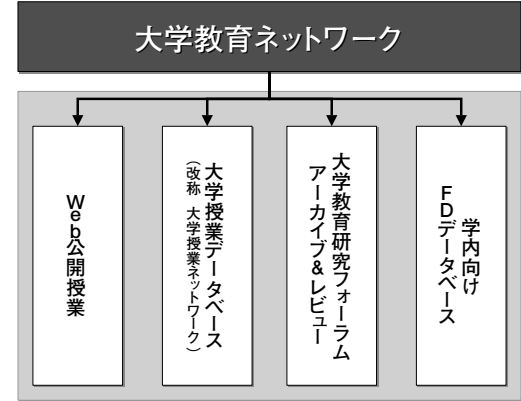
21

特色GP

【概念図2】



遠隔FDの試み



遠隔FDの試み

京都大学高等教育研究開発推進センター  
On-Line FD

このOn-Line FDは、大学授業の実践者が、日常的に手軽に、自分の授業を公開し検討しあうことを可能にするものです。

「大学授業ネットワーク」では、自分の授業をテキストにして紹介しあうことで、授業に関する知見やノウハウの共有をめざします。

「Web公開授業」では、自分の授業の映像を公開することで、オンラインで授業公開・検討会を可能にするものです。

くわしくは、こちらを参照してください。

大学授業ネットワーク      Web公開授業

お問い合わせ: info@online-fd.com

Copyright 2006 Center for the Promotion of Excellence in Higher Education, Kyoto University. all rights reserved.

京都大学高等教育研究開発推進センター      Kyoto University

大学授業ネットワーク  
Network for University Teaching & Learning      Since 2003

大学授業: ENTER 大学授業「座談会」: ENTER

私たちセンターはさまざまな教育や授業の実践をお伝えします。  
(注) 毎週火曜日の午後は、サーバーのメンテナンスのため、一時サービスを停止していることがあります。

遠隔FDの試み      高等教育センターホームページ      京大ホームページ

京都大学高等教育研究開発推進センター Kyoto University

## 大学授業

### 大学授業ネットワーク

Network for University Teaching & Learning Since 2003

目次

注意書き:  
 1) 大学が学部の授業の提供を受ける際の目的、科目目などは、所属大学のものになります。  
 2) 授業の提供を受ける際の授業料は各大学のものです。  
 3) 同一科目、同一の授業(ウェブ)に複数の講師が提供する場合、授業アインなどが見られます。しし目次では、そのなかから1人の講師の授業を本ページで提供しています。  
 4) 同一科目に2人以上の学生が提供する場合、できる限り個人が提供できない限り見られます。学生の提供が中心に実施され、授業の提供も、提供可能な限り個人が提供しています。

授業No. 授業者名・授業科目名

- No.001 溝上 賢一(京都大学高等教育研究システム開発センター)  
工学系の基礎(工学/工学)のシステム開発
- No.002 宇野 浩二(京都大学工学部)のシステム開発(工学/工学)のシステム開発
- No.003 宇野 浩二(京都大学工学部)のシステム開発(工学/工学)のシステム開発
- No.004 宇野 浩二(京都大学工学部)のシステム開発(工学/工学)のシステム開発
- No.005 宇野 浩二(京都大学工学部)のシステム開発(工学/工学)のシステム開発

26

授業No.002 電本 光雄(京都大学工学部)

### 自動制御工学

★ページのめざし★  
 授業の目的(目的)を学ぶ  
 (1) 学生の学習(目的)を学ぶ  
 (2) 学生の学習(目的)を学ぶ  
 (3) 学生の学習(目的)を学ぶ

授業の概要  
 授業の目的  
 授業の要点  
 授業後の感想・反省点

授業映像

授業の概要、授業のポイント、授業の様子、授業後の感想など

27

## 座談会

座談会の風景

座談会での議論の様子

28

京都大学高等教育研究開発推進センター

### Web公開授業

授業映像の選択

映像2画面同期

授業情報

電子掲示板(BBS)へ

29

### 遠隔FDの試み

#### BBS(一覧)

授業No.	授業者名	授業科目名	開始日時
No.001	溝上 賢一	工学系の基礎(工学/工学)のシステム開発	2006.07.21
No.002	宇野 浩二	工学系の基礎(工学/工学)のシステム開発	2006.07.21
No.003	宇野 浩二	工学系の基礎(工学/工学)のシステム開発	2006.07.21
No.004	宇野 浩二	工学系の基礎(工学/工学)のシステム開発	2006.07.21
No.005	宇野 浩二	工学系の基礎(工学/工学)のシステム開発	2006.07.21

#### BBS(記事表示)

記事一覧

2006.07.21 16:52:46

30

### センターの関与する学外FD

- 公開授業・検討会
- 公開研究会・大学教育研究フォーラム
- 遠隔FDの試み
- FD関連の講演など
- 大学教育学会課題研究

31

## 大学教育研究フォーラム

- 第12回(2006年3月27/8日)
- 「FDの新たな組織化をめざして—教員・学生・事務職員」
- 参加者：全国の大学教育関係者503名(うち京大内からは19名)
- 特別講演、シンポジウム、小講演9件、個人研究発表49件、ラウンドテーブル6件

32

## 大学教育学会課題研究

- 主題：「FDのダイナミクス—第一次調査のフォローアップと新たなモデル」
  - 第一次調査…一般教育学会が1987年に実施した我が国最初のFDに関する大規模実態調査
- 本年度から3年間
- 実施主体は、新FD研究会(絹川正吉代表)と京大センターの連合体

33

## 組織調査の意義

- 教育者集団の自己認識
- 個別的な教育改善の努力の連携
- 京大工学部FD研修
  - アメリカ型の統計処理などの可能な専門職職員の養成と配置を望むべきか?
  - 大規模な個別大学、地域拠点には、配置が望ましいかもしれない

34

## 学生の授業評価

- 啓蒙の手段として
  - 慶應SFCの例
- 反省の一手段として
  - ビデオ、公開授業
- 教育の一環として
  - 評価能力の養成

35

## 合宿研修とティップス作成

- 合宿研修
  - 北大方式 —その継承者である山形大学の研修の参加者のうち5分の1(20人程度)は、全国のFD関係者である
- ティップス作成
  - 名古屋大学、山形大学、山口大学、京都産業大学、岡山大学など
  - 名古屋大学のティップスは「成長」している
  - それ以降のティップスは、ローカリティを標榜するが、かならずしも実現されているとはいえない

36

## 公開授業の諸特性

- 1) 体験の具体性・全体性
- 2) 相互肯定・相互受容のために
- 3) 相互研修の共同体へ
- 4) 反省・学生評価・授業公開
- 5) 多様な実行形態
- 6) 他の諸事業との相互補完へ

## 授業におけるローカリズム

- 前任校の数学授業
- 京大の数学授業
- 東大の数学授業
- 授業に関する暗黙の合意ないし契約  
(黙契)

38

## 大学授業の現状

- 1) 教員リクルートが同一大学に強く限られている場合、一定の相互行為様式が強固に継承される。
- 2) これは、外からは明白だが、当事者はあまり自覚していない。
- 3) 今日の大学では、この無自覚性や非自覚性に反省が加えられざるをえなくなった。  
(以上は、授業参観プロジェクトなどによる知見)

39

## 学生参加型授業が求められる

- 一方では、大量に進学してくる学生のうちで、一斉教授では授業に抱き込めない意欲の低い学生へ、何とかして授業への参加意欲を促すため。
- 他方では、臨床場面で生きて働く臨床知を獲得させたり、科学技術の爆発的展開にコミットできる高度な創造性を育てるため。  
(ロースクールとの関連あり)

40

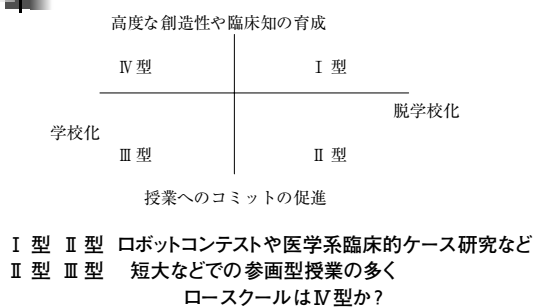
## ANSWERING AND ASKING QUESTIONS

By William E. Cashin, Kansas State University, 1995

- 1 Students Asking Questions
- 2 Answering Questions
  - Directly answer the question/Postpone answering the question/Discourage inappropriate questions/Admit when you do not know an answer
- 3 Asking Questions
  - Ask open questions-ended, not just close-ended questions/Ask divergent as well as convergent
- 4 Pauses and Silence
- 5 Creating an Accepting Atmosphere
  - (Teaching Tips Index)
  - <http://www.hcc.hawaii.edu/intranet/committees/FacdevCom>

41

## 学生参加型授業の4類型



42

## 参加型授業の類型

- 公開実験授業第1期 「何でも帳」
  - 公開実験授業第2期 集団討議
  - 神戸大学公開授業 米谷助教授
  - 林義樹 学生参画型授業
  - 田中一 質問書方式
- いずれも、それぞれのローカリズムに即して、学生を活動させている。

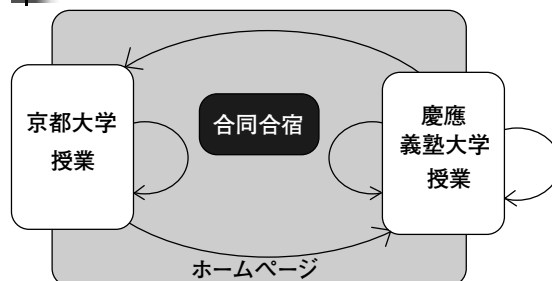
43

## 参加型授業の事例(KKJの場合)

- 1) 多様な場でのコミュニケーションを通じて、自己探索、自己形成を促進させる(教養教育の実現)
- 2) 大きな同質性と小さな異質性をもつ二つの集団による緊張を生かす
- 3) オンラインとオフラインを相補的に組み合わせる

44

## KKJ



45

## Web掲示板

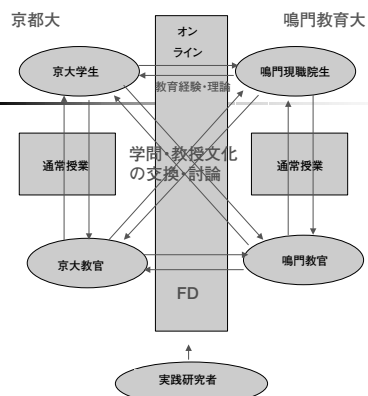


46

## 参加型授業の事例(京鳴プロジェクト)

- 1) 汎用性のあるハードウェアの使用
- 2) 専門的な課題に向けての連携という制約を付けた、学生参加型授業
- 3) 一般教育型参加型授業の回避
- 4) 京大の教育学部学生と鳴門の教育学専攻大学院生との文化的一致と差異

47



48

## 成果1 学生参加型授業の意義と難しさ

- 1) 学生参加の機会が増せば、学生の学びは、深く全体的でありうる。
- 2) しかしこの深く全体的な変化は、教師には(場合によっては学生自身にとっても)扱いが難しい。
- 3) 教師の直接介入の度合いが減少すればするだけ、教師には高度な指導性が要求される。
  - ~ 「枠」の重要性、制約と安定

49